

機材セレクト

ウィリアムオプティクス CAT 91 WIFD

超鋭い猫の瞳

川村 晶

CAT 91 WIFDによる勾玉星雲 (撮影/川村 晶)

Deepな天体写真 CMOSカメラのノイズ研究2 あぶらな一と

30 続 ノイズの種類とその原因の究明

36 どこまで使える? AIが描く宇宙の正確性 沼澤茂美

テーブル山 月の虹 満天の星 イワシロアヤカ

42 宙と大地をめぐるアフリカ星紀行

50 エーゲ海の風 番外編 天文遺産を歩くツアーガイド 憧れのルーブル美術館 早水 勉

56 連載小説「オリオンと猫」 第5回 オリオン! オリオン! 瀬名秀明
——野尻抱影と大佛次郎物語——

News Watch

5 爆発予想から1年「かんむり座T星」監視キャンペーン 今村和義



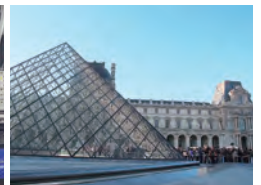
かんむり座T監視中 (p.5)



AIが描く宇宙 (p.36)



アフリカ星紀行 (p.42)



憧れのルーブル美術館 (p.50)

■今月の表紙
M8・M20付近

撮影/川村 晶

2025年4月27日1時33分 CAT 91 WIFD
キヤノン EOS RP (HKIR改造) ISO1600
総露光時間128分 (120秒×64コマ)
赤道儀にてガイド撮影 ステライメージ9/
StarNet++ (V2) / フォトショップ2024にて
画像処理 長野県木曽町にて
夏の代表的な星雲であるM8 (干潟星雲) や
M20 (三裂星雲) など、無数の星を背景に、
赤い散光星雲と青い反射星雲が入り乱れる
エリアをCAT 91 WIFD (p22から試写記事
掲載) と天体改造ミラーレスカメラで狙っ
てみた。M8から東に伸びるような星雲は、そ
の形状から近年では「猫の手星雲」とも呼
ばれている。北側で猫の指にあたる円形の
IC 4685も周囲から青い星雲が広がって
いて、よく知られたM8やM20にも劣らぬほ
どの造形美である。

■広告さくいん

コニカミノルタプラネタリウム/表2
ワイルド・ナビゲーション/8
協栄産業/66
シュミット/68
アイベル/70
笠井トレーディング/82~87
ウィリアムオプティクス/102
ピクセン/114~表3
五藤光学研究所/表4
AstroArts/4、12、49、72、74、76、78
AstroArtsオンラインショップ/88~91

星ナビ2025年7月号
2025年6月5日発行・発売

NEWS CLIP 石川勝也

由女のゆるゆる星空レポ 星の召すま

最新宇宙像 沼澤茂美+脇屋奈々代

7月の星空 篠木新吾

7月の月と惑星の動き

7月の天文現象カレンダー

7月の注目 あさだ考房

新着情報

月刊ほんナビ 原 智子

三鷹の森 渡部潤一

アクアマリンの誌上演奏会 ミマス

ブラック星博士のB級天文学研究室

天文台マダムがゆく 梅本真由美

天文学とプラネタリウム 高梨直統+平松正顕

6 天文・宇宙イベント情報 パオナビ 79

9 Observer's NAVI 変光星 高橋 進 80

10 新天体・太陽系小天体 吉本勝己 81

13 星ナビひろば 92

● ネットよ今夜もありがとう 93

● 会誌・会報紹介 94

● やみくも天文同好会 藤井龍二 96

● 飲み星食い月す 96

64 ギャラリー応募用紙/投稿案内 97

67 バックナンバー・定期購読のご案内/編集後記 98

69 オンラインショップ連動 買う買う大作戦 99

71 KAGAYA通信 100

73 星ナビギャラリー 103

75 銀ノ星 四光子の記憶 飯島 裕 112



星雲星団に特化した撮影鏡筒

超鋭い猫の瞳

5枚玉 全群エアスペース アドバンスド ペッツバル
William Optics CAT 91 WIFD

天体写真マニアの心を捉えたウィリアムオプティクス社のRedCat 51。

その後CATシリーズとして発展したが、

今回は最新モデルのCAT 91 WIFDを取り上げる。

口径91mm、焦点距離448mmの撮影専用屈折鏡筒だ。

基本的な仕様や特徴は、見やすい図版を用いた解説が

メーカーサイトで提供されているのでそちらを参照いただくとして、

ここではユーザー目線での性能評価や

いわゆる「現場」的な使い勝手などを軸に紹介していこう。

解説・写真◎川村 晶

取材協力◎くらぶちこども天文台 / 神津牧場天文台

燃える木星雲からオリオン大星雲

やや余裕のない構図だが、「燃える木星雲」から「馬頭星雲」、M42までをフルサイズで収めた。色調の豊富さを重視して、ナロー系フィルターは使用していない。総露光時間が少なく、やむなく薄雲が通過したカットも合わせてスタックしたので輝星が滲んでいるが、過去の作品でよく目にしたオリオン座γ星アルニタクの星割れ現象は見られない。

2025年1月21日21時00分

キヤノン EOS RP (HKIR 改造)

ISO1600 総露出時間117分 (128秒×55コマ)

赤道儀にてガイド撮影

ステライメージ9/StairNet++(V2)/

Photoshop2024にて画像処理

群馬県高崎市にて



ウィリアムオプティクスとCATシリーズの系譜

ウィリアムオプティクス (William Optics) は、台湾の望遠鏡メーカーである。2001年より望遠鏡の販売を開始し、わずかな期間で世界的な望遠鏡メーカーへと成長した。なかでも2018年に発売された口径51mmで撮影向きの屈折鏡筒であるRedCat 51が、天体写真撮影を行う世界中の趣味人に支持され、国内では「赤猫」の愛称も付くほどのヒット商品となった。以降、CATシリーズとしてバリエーションモデルを展開し、好評を得ている。シリーズ名の由来は明らかにされていないが、「ネコのように軽く、ネコの眼のように鋭い」というキャッチフレーズが付けられていることから、小型軽量で鋭像を結ぶ鏡筒という意味が込められているようだ。

現在、CATシリーズは、当初の製品スタイルを踏襲したクラシカルCATと、より口径の大きいウルトラCATと呼ばれるふたつの製品群でシリーズ展開されている。いずれも、基本的には天体撮影用として開発された「ペッツバル設計」の屈折鏡筒である。

近年、撮影用屈折鏡筒の仕様としてよく見かけるペッツバル設計とは、写真用のレンズとして考案されたペッツバルレンズの光学素子配置を基本としたものだ。1840年にスロバキアの数学者であるジョゼフ・ペッツバルによって考案されたもので、数学的な計算によって光学設計された初のカメラレンズでもある。従来の経験則だけでは実現できなかった明るいF値を持つレンズであることが、大きな特徴だ。

オリジナルのペッツバルレンズは、凸レンズと凹レンズの組み合わせを2組、計4枚のレンズを前後の2群に分けて配置している。球面収差と軸上色収差は前後群でそれぞれ補正でき、コマ収差と歪曲収差、さらに倍率色収差を前群と後群で互いに打ち消し合うように補正できる。残る非点収差と

■ CAT 91 WIFD 主な仕様

光学系	5枚玉 アドバンスド ペッツバル (スーパー ED ガラス×2、ED ガラス×1、ランタンガラス×1含む)
口径	91mm
焦点距離	448mm (F4.9)
イメージサークル	直径55mm (中判カメラフォーマット対応)
フォーカサー	ラックアンドピニオン WIFD (EAF 取り付け可) / 繰り出し量 0 ~ 36mm
バックフォーカス	60.8mm (M48) / 65.8mm (M54)
全長	556mm
鏡筒外径	116mm
重さ	4.72kg (鏡筒のみ) 6.3kg (バンド、プレート類含む)
付属品	M63→M54 アダプター、M63→M48 アダプター
対応カメラマウント	キャノン EF/RF、ニコン F/Z、ソニー E、ペンタックス K、MFT、フジ X

価格 423,500円 (税込・天文ハウス TOMITA での価格)



像面湾曲はそれぞれ密接に関係するが、当初は像面湾曲を残したことで、ポートレート向けのレンズとして活用されたという。写野の周囲がボケるので、主被写体である人物を浮き上がらせる映像効果が好まれたということだろう。

光学系は5群5枚のアドバンスド ペッツバル

さて、今回はウルトラCATのラインアップから口径91mm、焦点距離448mm (F4.9)

という仕様の「CAT 91 WIFD」を取り上げる。

光学系は、5群5枚構成のアドバンスド ペッツバル (Advanced Petzval = 進化形ペッツバル) と称した設計とされている。

光学設計に関する詳細な情報は公開されていないが、メーカーのWEBページに掲載されている画像を見る限り、まず前群は3枚玉である。2番目と3番目のレンズは密着しているようにも見えるが、最前面のレンズは後ろの2枚のレンズとはやや離れている。また、後群はオリジナルのペッツバル

ノイズの種類と その原因の究明

黒い縮緬ノイズ

非冷却カメラの前処理段階で生じたノイズ例

冷却カメラとは異なり、非冷却カメラではライトフレームとダークフレームの撮像温度を揃えることが難しく、前処理の過程でダークの過補正が起こり「黒い縮緬ノイズ」が発生することがある。このようなケースでも、「ステライメージ10」の新機能を用いることでノイズを大幅に軽減することができる。

HAC125+DBP-EX-UHS フィルター+ QHY5 III 585C ゲイン100
16秒露光×128 コマコンボジット EQ6Pro 赤道儀 ノータッチガイド

上段画像：通常のダーク減算処理（ダークフレーム128コマ使用）

ノイズ退治八分 炙り出し二分

下段画像：前処理段階で、ダーク減算に加えて
「ピクセルマッピング」と「クールファイル補正」を実行

天体用 CMOS カメラのノイズは奥が深く、コンボジットやダーク減算などの優先度が高いノイズ処理を進めるごとに、新たなノイズが次々と現れてくることがあります。また、画像処理工程の後半で淡い星雲を強調する処理を実行すると目立ってくるノイズもありますが、コンボジット処理した後では補正が困難なケースも多いものです。そこで今回は、これらの「ややマイナーな」ノイズの詳細について、その発生イメージと画像に与える影響について紹介します。



解説◎あぶらなーと
← フログ

先月号では、CMOSカメラによる星雲星団撮影で画像作りの障害になる5種類のノイズのうち「光子ショットノイズ」と「ホットピクセル（白い縮緬ノイズ）」について、その原因と対処方法を解説しました。今月号では残りの3種類のノイズを殲滅する方法を伝授します。

殲滅優先度3 「クールピクセル」

「白い縮緬ノイズ」とは逆に、画面全体に暗い縮緬皺状のノイズが発生することがあります。これが「黒い縮緬ノイズ（図1、3）」です。なお「黒い縮緬ノイズ」は、モノクロカメラでは黒、カラーカメラではRGBの補色であるCMY各色（シアン・マゼンタ・イエロー）で現れます。

その主要因は、①カメラのイメージセンサーにクールピクセルが存在する。②天体撮影時の追尾エラーがある。の2点です。

CMOSカメラのセンサー内には、クールピクセルと呼ばれる周囲よりも出力が弱い異常ピクセルが存在します（図2）。一見すると、各ピクセルの明るさの差を補正するダーク減算や、各ピクセルの感度を補正するフラット除算で補正できそうに感じますが、じつはクールピクセルは強敵です。図4はASI1600MM-Coolを用いて、特定のクールピクセルが周辺ピクセルの明るさによってどう変化したのを実測したものです。このよう



図1 「黒い縮緬ノイズ」が顕著に現れた例

クールピクセルが多いカメラ個体で撮影すると黒い筋状のノイズが発生することがある。
BORG 60 ED + レヂューサー + ASI1600MM-COOL + LPS-D1 ノータッチガイド -10度
ゲイン 300 30秒露光×60コマコンポジット

にクールピクセルの明るさは被写体の明るさによって非線形に変化することがわかりました。輝度差のグラフが水平になっていないということは正常ピクセルとの輝度差が一定でないことを示します。したがって、ダーク減算処理では補正できません。図5は同様の条件で、特定のクールピクセルが周辺ピクセルの何倍の明るさを持っているかを実測したものです。輝度比のグラフが水平になっていないということは、正常ピクセルとの輝度比が一定でないことを示します。したがって、フラット除算処理でも補正できません。

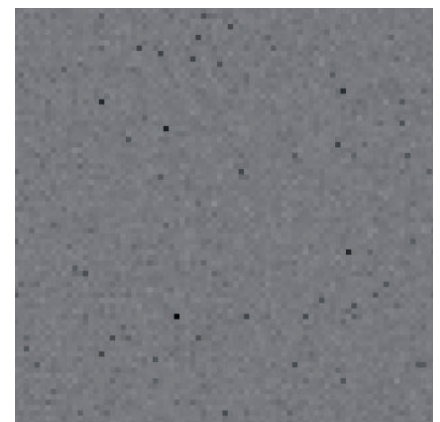


図2 ASI1600MM-Coolのフラットフレーム内に現れたクールピクセル

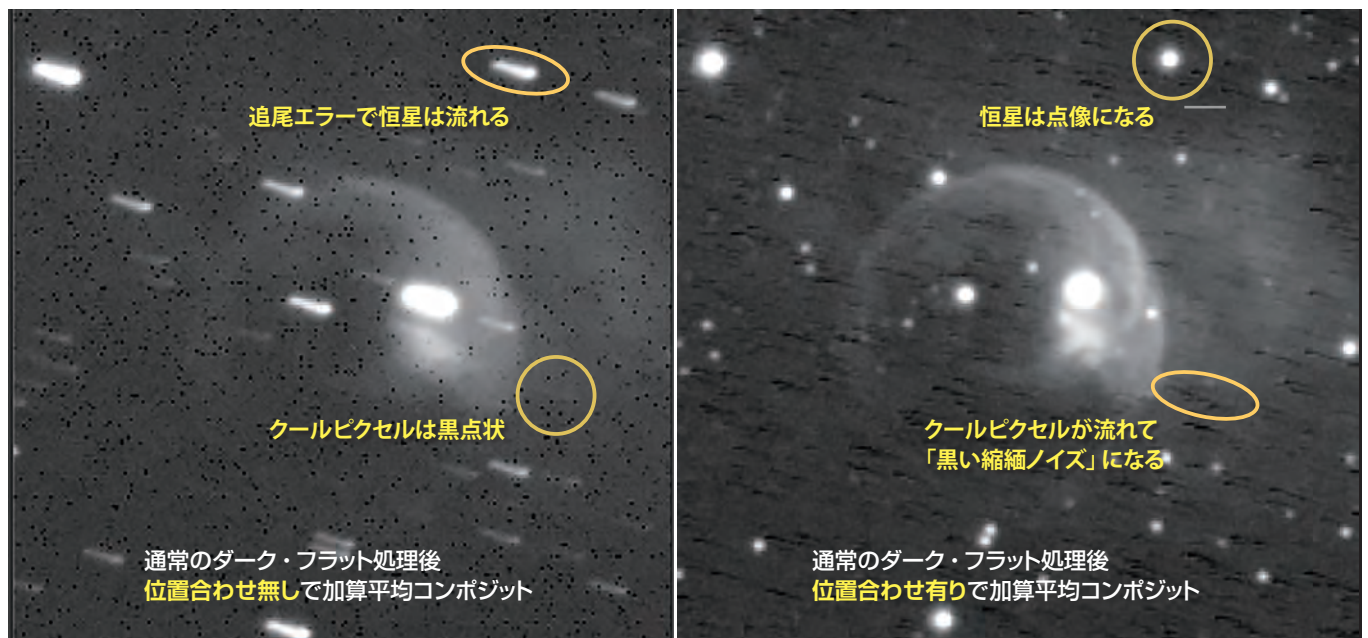


図3 クールピクセルにより「黒い縮緬ノイズ」が生じる原理

クールピクセルによるノイズはセンサー内の特定座標上に生じる固定ノイズのため、本来は黒点状に写る。ただし、コンポジット時に対象天体の追尾エラーを補正するよう位置合わせすることにより、背景内の黒点が流れるため、暗い筋状のノイズとして観察される。

共通データ：-10℃ ゲイン 300 30秒露光×256コマコンポジット ダーク×128 フラット×256 ダークのフラット×256コマ使用 オートガイド



AIが描く 宇宙の正確性

生成AIの登場で誰もが高品質なイメージの世界を具現化できるようになった。

これは創造の民主化ともいえる。

AIというツールを用い、広大な未知の領域が広がる宇宙を描いてみよう！

解説◎沼澤茂美

AIと生成 AI

「AI (Artificial Intelligence)」とは人工知能のことであり、ユーザの指示（プロンプト）について、さまざまなデータをもとに推論、学習、認識、問題の解決、予測などを行う。

それに対して「生成 AI（ジェネレーティブ AI）」は、AI の分野の中でも特に画像、テキスト、音楽、動画などを生成することに特化した技術を指している。つまり、生成 AI は、AI という大きな分野の中のサブカテゴリといえる。では具体的に生成 AI で何ができるのだろうか？

1. テキスト生成

一般的な文章の作成に加え、なんと詩や物語なども創作できる。また翻訳や長文の要約、文書書き換え、質問の回答や、会話（チャット）なども自然に行える。

2. 画像生成

テキストから画像を生成、画像の改変、画風の変更（写真をアニメ風に変換とか）、ロゴやイラストのデザイン作成が可能。

3. 映像生成

テキストから映像、アニメーションを作成、また、複数の画像を元にそれらを補完する形で映像を作成する。既存の動画の編集や欠落した映像部分の補間も可能。

4. 音声・音楽生成

テキストから音声を合成、音楽や効果音の作曲、声のクローニングなどが可能。

その他、「プログラミングのコードの生成」「トレンドの予測」「データ分析」「アイデアやマーケティングコンテンツの作成」「各種学習プランの作成」「メールの作成・修正」などが可能だ。

画像処理ソフトにはノイズ軽減、画像拡大（リサンプリング）機能でAI の導入が行われているが、最近では生成 AI による、写真に写った不要な部分を消去し、その背景を自然な描写に塗りつぶす機能や、



未知の文明惑星

プロンプト「太陽系外惑星、高度な文明を持つ地球型惑星」で生成した画像。このような画像を10秒足らずで生成してくれるのは驚くべきことだ。緻密さやパースペクティブの整合性、空気感などは秀逸だ。もしこれを手描きで作成したとすると、構想から完成まで1週間は要すると思う。



未知の文明惑星

左ページの画像と同じプロンプトで描いたバリエーションの一つだ。背景はひじょうにアバウトだが、惑星の全体像は、水に覆われていて夜の部分に人工光が密集しているなど、文明惑星の雰囲気は良く出ている。



桜と星空

桜と星空のコラボレーションもひじょうに派手な画像を生成してくる。

まるで昼の景色に星空を切り貼りした新星景写真のようだ。この画像は「1本の桜の花と星空、暗い空、桜の花がうっすらと見える」というプロンプトで生成した最も地味な画像だ。色々試行錯誤してAIの作成する画風を把握する必要がある。星空は、実際の星空とは異なるものを生成してくるので、逆にそれが「既存の星空を流用していない」ことを示しており、安堵する部分でもある。



星空の下で

最初に画像生成したイラスト。プロンプト「星空の下望遠鏡を向ける少年少女」でAIはデフォルトで4枚の画像を生成してくれた。AIによってはあまりにリアルすぎるものや、望遠鏡の構造があり得ないものが多い見受けられるが、このようなシンプルなカットは利用価値が高く、加工などが容易にできる。

絶景と星空 プロンプト「山奥の雪景色と星空、幻想的な世界、天の川は見えない」で生成した画像だが、しっかりと天の川が描かれている。この画像はAdobe Fireflyで描いたものだが、一般にAIでの星空の描写は「映え」の要素が強調されていて、SNSでもてはやされる星空風景の写真傾向を反映しているように感じる。もっと落ち着いた暗い星空を描かせようとプロンプトを変更してもこの傾向はなかなか崩せなかった。



ChatGPT

もっとも有名な生成 AI



Grok

X (旧 Twitter) のデータを参照



ナミビア・ナミブ砂漠（ナミブランド自然保護区）にて。天の南極を中心に。

アフリカ 星紀行

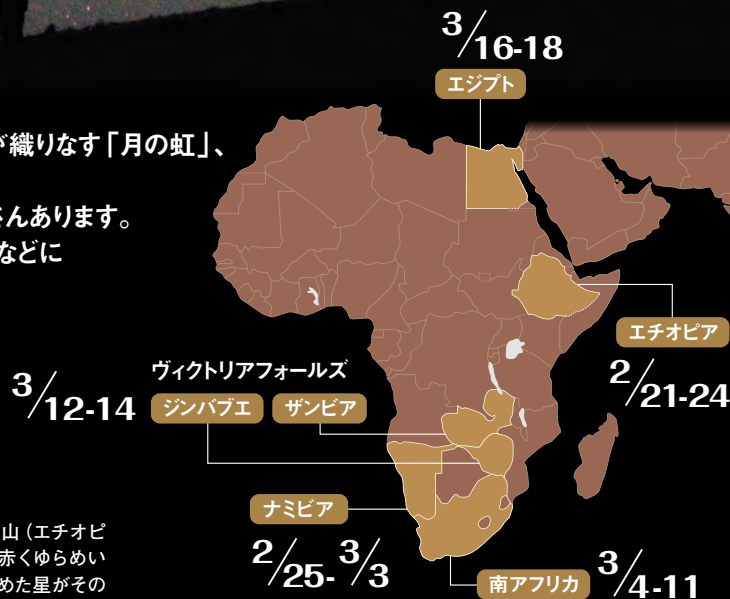
星と大地を
めぐる旅

星座になった山「テーブルマウンテン」や、水と月の光が織りなす「月の虹」、南アフリカの望遠鏡たちや静かに降り注ぐ満天の星。アフリカ大陸には一度は訪れたい天文スポットがたくさんあります。エチオピア・ナミビア・南アフリカ・ジンバブエ・エジプトなどに星空と大地を巡る旅に出かけましょう。

紀行◎イワシロアヤカ

私には、ずっと心残りがあった。9年前、27歳の時に出かけた世界一周の旅。東南アジアから始まり、インド、中央アジア、中東、そしてアジアの西の果てまでたどり着いた。次はいよいよアフリカだという時、体調を崩し、無念のうちに日本に帰国したのである。そのときからずっと、アフリカは私の中で“終わっていない場所”として、心のどこかに居座り続けていた。

いつか、あの大地に立ちたい。いつか、人・地球（ほし）・宇宙をあ場所で感じてみたい。そんな思いを抱え続けていた私に、不意に「行ってきなよ」と家族が背中を押してくれた。今こそそのときだと。36歳の今、アフリカ大陸を縦断しながら、星空をめぐる旅に出ることになった。



エルタ・アレ火山（エチオピア）。噴出口は赤くゆらめいて、またたき始めた星がその向こうに静かに浮かんでいた。





(上) ナミビア・ナミブ砂漠 (ナミブランド自然保護区) の夜明け。キャンプ地での一枚。運転してきた車は四輪駆動車。上に積んでいるのがテントだ。
(下) ナミビア・ナミブ砂漠の中にある案内看板。星空が世界的に認められていることが紹介されている。



ナミビア・ナミブ砂漠 (セスリエム) DUNE45 に登ったところ。赤い砂は夕陽に当たってますます赤い。

私が22歳の時から「星を見せる・伝える」ことを始めて14年。知らなかった世界に出会い、体験し、知ることはその人の世界を広げることだと、星を見せる活動を始めてから知ることができた。だからきつと、私の世界もこの旅でさらに拡大するのだろう。

大地が生まれる場所 エチオピア

旅の始まりの地は、エチオピア。大地が生まれる現場をこの目で見るのが目的だ。

ツアーに参加してやってきたのは、隣国エリトリアとの国境地帯にあるダナキル砂漠。地球上で最も過酷な場所のひとつと言われるこの地で、私は、溶岩の湖が見られるというエルタ・アレ火山を目指した。

何時間もかけてようやくたどり着いた火山のふもとから、沈みゆく夕陽を背に、頂上の溶岩湖を目指す。ひと月前に起きた大規模な噴火で赤いはずの溶岩湖は塞がれ、できたての黒い地面が火口いちめんに広がっていた。それでも黒い地面から突き出たいくつかの噴出口は赤くゆらめいて、またたき始めた星がその向こうに静かに浮

かんでいた。地球の体温を感じる地面と、シューシューと音をたてる燃える溶岩、そして火山ガスの匂い。大地が生まれ出る現場に私は立っていた。

地球が生きていること、自分がこの生命活動の一部であること。壮大な新陳代謝を目の前にして、自分もまた、新たになった気持ちになった。

その夜は、火山のふもとでキャンプ泊だ。溶岩の大地にテントは張れない。マットレスと毛布が支給されるだけの寝床で、頭上に広がるのは満天の星だ。なだらかで低い火山だから、夜空は大パノラマである。ツアーメイトにお願いされて、私はここで星空を案内することになった。一緒に惑星を探し、星をつなぎ、星座をみつけて、流れ星に喜んだ。私が質問攻めに合うほど、みんな真剣だ。このぜいたくな宇宙を堪能しないなんてもったいなさすぎる。みんな、同じことを考えていたに違いない。

こんな秘境で偶然にも一緒にいるのだから、きっと共鳴するものがあるのだろう。旅人たちはめいめいに、星をつなぎながら眠りについたらしい。それを聞いて私はと

ても嬉しくなった。14年やってきた中で一番、心に届いた実感があったかもしれない。

溢れるような満天の星 ナミビア

次に私が目指したのは、新月のナミブ砂漠の星空である。エチオピアから飛行機で5時間かけて、首都のウィントフークに降り立った。

ナミビアではロードトリップが主流だ。私も例に漏れず、ウィントフークでレンタカーを借りる。もちろん四駆だ。車の修理グッズ、調理器具、テントなどのキャンプ道具を積み込み、6日分の食料を買い込んでナミビア南部のナミブランド自然保護区を目指し走り出した。

砂漠のただ中にあるまっすぐな道を運転し続ける。ナビがいうには所要5時間のはずが、実際には7時間もかかった。ナビが真面目に最高速度の120キロで計算なんかするからだ。そんなスピード、出せっこないに決まっている。舗装区間はごくわずかだし、道が川に寸断されている箇所もある。ナミビアでの車のトラブル（スタック、パンク、スリップなど）発生率は7割以上

番外編

憧れのルーブル美術館 天文遺産を歩く ツアーガイド

水先案内人 早水 勉 (佐賀市星空学習館)

はやみず・つとむ

星食観測・研究をライフワークとして活動し、日本天文学会天文功労賞、国際表彰「ホーマー・ダボール賞」を受賞。古代ギリシアを中心とする天文学史にも造詣が深い。ウェブサイト「HAL 星研」に、この連載からの抜粋をまとめた「星座の神話 定説検査」を公開中。

<http://hal-astro-lab.com/history.html>

「サモトラケのニケ」(BC200～BC1752年ごろ)。ニケは古代ギリシアの勝利の女神。1863年ギリシャ・サモトラケ島で胴体と多数の断片が発見された。制作者は不明。発見後の努力により2014年までに修復された。1950年、新たに右手が発見されているが未修復。

連載「エーゲ海の風」を「星のギリシア神話研究」と題した一冊の本にまとめることができました。読者の皆さんは、古代の宇宙観や神々の姿が、各地に残された歴史遺産や、さまざまな時代の美術品・工芸品によって、現代に伝えられていることに気づかれたでしょう。そのようなエーゲ海から吹く風を体感できる場所のひとつが、フランス・パリにあるルーブル美術館です。天文ファン必見の歴史遺産をこの目で見るために、初めてルーブル美術館へ行ってきました。

エーゲ海の風

星座神話の向こうに広がる
古代ギリシアの天文学

さあルーブル美術館へ

筆者は、天文学の発祥や古代の天文文化に、特に関心を持っています。関心ごとをひとつふたつと「なぜ?」と掘りこんでいくと、このフィールドはまだ研究途上の事柄も多く、日本には紹介されていないこともまた多いことに気づかされます。現代につながる天文学のルーツの本流は、古代メソポタミアから古代ギリシアにあることはよく知られています。ところが18世紀になると、これらの遺品の価値に気づいたイギリスやフランスを中心としたヨーロッパの列強は、天文を含む古代の遺産をかたっぱしから奪い本国に持ち帰ってしまいました。

現在、大英博物館やルーブル美術館に質・量ともに膨大な遺産が収蔵されていることは、歴史的にはなんとも複雑な心情ながら、「そこに行けば見られる」状況があるのは確かです。私はかつて、ギリシャのいくつかの博物館と大英博物館を訪問したことがありましたから、ルーブル美術館にもどうしても行っておきたかったのです。

コロナパンデミックを経てようやく2025年2月、大学の春休み中の娘とふたりでパリに旅行することになりました。このときにパリ天文台・ムードン天文台も訪問したので、このお話もいずれかの機会に紹介しましょう。天文屋の家族によくある話の例にもれず、私の娘は天文にあまり興味はありませんが、幸いギリシア神話は大好きです。父親との旅行は微妙な年ごろですけど、旅費は父親持ちでちゃっかり同行となりました。

ルーブルに着くと、中庭の中央に有名なガラスのピラミッドが迎えます。ここが美術館のメインの入場口※1で、開館前からもうたくさんの来館者で溢れ、予約してあっても入場を待たされてしまいます。筆者の目には入場ゲートの少なさがボトルネックになっているように思われました。手荷物検査を終えたと下りエスカレーターの先にある広大なナポレオンホールに解放されます。

見学にはオーディオガイド※2がお勧めです。オーディオガイドは日本語を含む多数言語に対応しており、タッチパネルで触っているうちに直感的に操作できるようになって



ピラミッド入場口。開館前からたくさんの来館者であふれる。

いるのはさすがです。主要な展示品の解説だけでなく、現在地を示すマップの機能があるのは助けられます。迷路のような広大な施設の中で、複数階に分かれて展示がありますから、一体どこにいて、どの方向に向かっているのかさえわからなくなってしまいます。

ここには、数日かけてもすべての展示物を見ることはできない世界最大級の膨大な展示がありますから、「そのうち見つかるだろう」とやみくもに見て歩くのは無謀というもの。目的の展示の場所と見どころは、ガイド本やホームページなどで事前に調べることが賢明です。私たち親娘も旅行前に目的の作品の予習をして行きましたが、娘が楽しみにしていたフェルメールの展示室はなんと閉鎖中で、これはとても残念。ルーブルはメンテナンスなどの理由で、順繰りに一部の展示室を閉鎖するそうです。

天文遺産見学のポイント

ルーブルは日本語で「美術館」と書かれることがほとんどですが、公式名(英語)は「Louvre Museum」で、美術品だけでなく、歴史遺産を所有する巨大博物館でもあります。

す。「シュリー翼」「ドゥノン翼」「リシュリュー翼」の3つの構造に分かれていて、本記事で紹介する天文遺産もエリアごとに分かれて展示されていますが、ここでは時代順に紹介します。

展示品は自由に撮影(ただし、三脚とストロボはNG)できることも魅力です。多くの美術品が触れられそうな距離に展示されているのは、うれしくもあり大丈夫なのかと心配にもなるほどです。

1. 古代メソポタミア

現在につながる星座の発祥は、BC3000年ごろの古代メソポタミアに求められます。リシュリュー翼に古代メソポタミアの遺産が展示されており、その中に星座の発祥の中でも最古級の証拠となる展示物があります。クドゥルと呼ばれる境界石です。クドゥルは、土地の所有権を示すための石碑で、メソポタミアの神と星座が描かれ、多くは最上部に月と太陽と金星が彫られています。

ルーブルには保存状態の良い3点のクドゥルと、多数の破損したクドゥルがまとめて展示されています。私たちが文献やインターネットから得られるクドゥルの情報は正面からの図像がほとんどで、背面はなかなか知ることはありません。ここ(背面)にびっしりと楔形文字の碑文が記されていることは実物を見て知りました。破損したクドゥル

※1 ルーブル美術館の入場口…メインの「ピラミッド入場口」の他、美術館の北側に「カルーゼル入場口」がある。

※2 オーディオガイド…6€。任天堂が開発。使い続けると半日ほどでバッテリーが切れるが、窓口を持って行くと無償で交換してくれる。

連載小説

オリオンと猫

—野尻抱影と大佛次郎物語—

瀬名 秀明

題字・挿絵：吉原宏平

【第5回】

「オリオン！ オリオン！」

ステンドグラスの光

千里だけでなく記念館全体にとって忙しい日が続いた。年が明けて新しいテーマ展示への準備が大詰めとなり、毎年恒例の「ねこ写真展」も始まる。大佛次郎が猫好きであったことに因んで全国から愛猫の写真を募り、一階ロビーでパネル展示して、来館者の皆様にお気に入りの猫へ投票していただく人気のイベントだ。《おさらぎ選集》の編集も来年度の発行に向けて作業が進んでいた。

千里にはもうひとつ新しい仕事ができる。館内の“ミニートク”ガイドをときおり任されるようになったのだ。展示解説や建物の紹介はそれぞれ月一回、土曜の午後に職員がローテーションでおこなっているが、それ以外に団体見学や取材が入ったときは先方の要望に合わせて館内を案内することもある。以前に高岡先輩が天文雑誌の編集者らを迎えたときのように、千里が解説をおこなうのだ。

「大佛次郎が最初に飼った猫はオスですかメスですか。なんて名前？」

「二〇〇個の猫の置物は、いったいどこにしまっていた

んですか？」

思いがけない質問も飛び出すので、千里にとっては勉強になる。その度に事務室に戻ってから先輩に聞いたり資料を引っ張り出したりするわけだ。

昨夏に取材を受けた天文雑誌の編集部からは、野尻抱影のじりほうえい生誕一四〇年に合わせて、記念館の取材記事が載った新年号が送られてきていた。先輩たちも興味津々といった感じで雑誌を囲み、かわるがわるページをめくっていたが、千里も天文誌を読むのは初めてだった。たくさんの天体写真も載っているが、読者からの投稿コーナーには大きく誌面が割かれており、ひとつひとつの作品にはレンズや機材の詳細な説明と投稿者のアピール文が付され、さらにはそれを受けた編集部のコメントもある。きっと雑誌に採用されることは天文愛好家にとってこの上ない名誉で、「載りました！」と歓喜の報告やお祝いの言葉がSNS上で飛び交うのだろう。撮影者の意図を的確に読み取って賞賛する編集部コメントも、雑誌と読者の信頼関係を育むポイントに違いない。なるほど千里は思い至った。これは明治から大正時代に大流行し若者の心を捕らえた、かつての投稿雑誌そのものののだ。

野尻の特集記事は夏の取材にもやってきた、あの作家が書いていた。

《野尻抱影が“星の人”であったならば、大佛次郎は“月の人”であった。長兄は星を言葉で伝え、末弟は月を言葉に置いた。》